

シニアエンジニアの海外放浪記雑感

2016.10.1

藤木良隆(S.40 年卒)

1. 自己紹介

- 1) 筆者は I 社及びその関連会社を満 61 歳で卒業、技術士の資格の勉強をして 62 才で建設部門(鋼構造及びコンクリート)と総合技術監理部門の資技術士資格を同時取得。
- 2) 今までの物づくりの技術、建設工事の経験を活かして海外プロジェクトの施工監理を中心に第 2 の人生に挑戦することを決意。14 年が経過した現在 75 才は年齢的に一つの潮時かと即ち第 3 の人生への舵取りが必要かとの思いで、14 年間運営してきた法人(有限)を今、“休止”に切り替え、技術士事務所(法的には届け出の必要はない)を設立済みである。
- 3) 14 年間で 10 数プロジェクトに殆ど中断なく関わってきたので、簡単に概略を述べたい。なお友人からはぜひ本にしたらと助言されるが、今までには技術雑誌に寄稿 1 回、講演を数回行った経緯はあるがまだ本にするまでには至っていない。もう少し文才があれば状況は変わっていたかも。

2. 現役時代の経験と海外放浪について

- 1) 現役時代は自分から望んだ訳ではないが、高度成長期の物づくりの時代に遭遇したため比較的多くの海外経験を持つことになった次第。昨今は海外へ出たいという若い人が少ないと聞くが、外の世界を知ることは実に得難い経験であったと思う。筆者の現役時代、米国、中国、韓国、トルコ(短期出張)更にブラジル出向(6年半)というように実に多くの機会を持てたのはその後の第 2 の人生選択に大きく影響したと断言できる。
- 2) 翻って自分の人生を顧みると、現役時代の延べ約 8 年の海外と第二の人生における 14 年間の海外プロジェクトの期間はとりもなおさず下記に示す”Variety”に富んだ期間で充実していた時代であったと言っても過言ではない。なぜなら現役時代は大きな組織を動かすという醍醐味はあるが、自分が何をやれるかを追求したステージではない。トータルで海外 22 年の経験の中で、後半の 14 年は自分がすべてに対応することが必要(各々異なるクライアントとの契約、一緒に作業する日本人またはローカルエンジニア、異なる言語、習慣、食事等々)であった。また数々の異なる環境下での仕事故、安全管理を手始めに、主たる連絡手段は英語であり、その他すべての面で自分が責任をもって処理していく局面が増える事は自分の成長に繋がるのではないだろうか?もし今その質問を受けたら、筆者としては声を大にして”Yes”と言わせていただきたい。

3. 海外プロジェクトの事例(10 数件を時系列的に記載)

: 紙面の都合で簡略化するのでご理解いただきたい。(またの機会があれば詳述したいが)。

- (1) ペルー国ユンカン水力発電所建設プロジェクト---N社の **Steel Structural Engineer** として 8 ヶ月間勤務--海外本格参戦の最初のプロジェクト(アンデス山脈での水門、水圧鉄管の製作、据付けの施工監理)--製作、据え付けは世界的なアルストムとスカンスカ。

・現地は英語とポルトガル語（昔のブラジル時代の杵柄）で初チャレンジをしてみると意外と自信を得た工事であった。“論より証拠”、“為せば成る”というところか！

・アマゾン川上流のダム建設現場に向かうランドクルーザー(ピストル携帯の護衛付き)からの脳裏に残る風景: 筆者が海外プロジェクトにのめり込む切っ掛けとなった風景である。

(2) USA N/Y州の仕様での TRI-BOROW Bridge の上部構取り換え工事に関わる上海日系企業で中国人作業員相手に技術アドバイザーとして USA の PM, 検査官と渡り合う局面を体験。10ヶ月間に及んだが、最終的には技術的にも納期的にもまとまり、事なきを得た。久しぶりに USA のプロジェクトの本質を理解する貴重な機会となった。

(3) 3,000 トン F/C の製作から試運転までのプロジェクト---船体は上海の工場で作製、韓国/釜山で最終艀装、試運転:までを含めて約6ヶ月間の I 社の PM 補佐業務を実体験。中国の鉄構物の品質管理の悪さ加減に驚愕した貴重な体験となり補修工事を伴う難工事であった。

(4) 香港国際空港の APM Car(Automated People Mover)で I 社の Site Manager を1年間: 空港において Steel(中国大陸で作製,据付け), Concrete 工事、電気工事をはじめ 車両の地下への搬入、自動運転等現地企業との Coordination も大切、言語はすべて英語の世界。

(5) シンガポールの P 社へ日本の掘削会社から発注した Jack Up Rig (重量約 13,000 トン)の鋼構造物の製作、工程、品質管理のオーナー監督業務。外注先(中国、タイ、インドネシア、マレーシアも含めて)動き回ることとシンガポールは船台での船殻、艀装、進水作業における品質管理、中でも Leg に大量に使用されている HT 80 は Crack 防止が品質の重要管理ポイントであった。

(6) 日本の I 社に発注した Semi-sub Rig の大改造工事にシンガポールで使っていたフィリピン人エンジニアを連れて同上 J 社の検査官として半年間駐在。唯一の国内工事であったが、しばし離れていた日本の工場も現場は海外の下請作業員が溢れているのには驚いた。

(7) ベトナム/ハノイ市内の”Traffic Safety Improvement Project”は:18 橋の歩道橋の製作、据え付け全般の日本の N 社の現場代理人として勤務。現地ゼネコン 2 社と Local Engineer を指導しながら1年間で工事を完遂。ベトナムは親日的であり、当時、今でいう中国に代わりうる物づくりの対応拠点になりそうな国であると強く感じた次第である。

(8) アフリカ/モザンビークにおける石炭 Project の大型運搬とコンベヤーの据え付け工事を商社 M 社の現地窓口の日本人エンジニアとして1年8ヶ月間勤務---昔の杵柄で英語の他にポルトガル語を駆使してブラジル (Valle) のエンジニア、南アの機械組み立て業者と運搬機製造ファブの中国人 SV らとの間に立ちクライアントとの調整作業を中国人営業マンと共に一手に引き受けた。気候風土の違うアフリカの内陸部で携わった貴重な体験であった。その時、現地の黒人エンジニアから”自分の子供が2ヶ月後に生まれるので子供に Fujiki の名前を付けさせてほしい”と言ってきたのには驚いた思い出がある。

(9) 新興国東チモールの財務省ビル(11FL)の建設における施工監理業務全般: 建設ゼネコンはインドネシア、元々施工監理業者はインドネシアの会社(これでは心もとないというクライアントの理由で日本のコンサルが参入)に加えて、日本のコンサルタント会社が施工監

理の一翼を担うこととなり、筆者が約5ヶ月間その一員として関わった。当初からのインドネシアコンサルのメンバーと現地のエンジニアを束ねて管理していくという構図。クライアントを含めた月例会議も当方で主導、誠意を尽くせばなんとでもなるものである。

(10) 2013年7月から参画した NUBIA Construction Project(ウランバートル国際空港)の日本側コンサル (JV-A 設計) の構造部門の Chief Structural Engineer として-施工監理その他全般の関連業務を担って約2年半。メインコントラクターは日本のM社・T社 JV, 建設工事は韓国の Samsung Engineering。常時ローカルエンジニア5~6人を配下に置き、共同作業で彼らのレベルアップを図ることを念頭に仕事に注力したものである。日本のゼネコンが加わっておればまた違う展開になったであろうことは想像できる。冬場の5ヶ月間は厳冬期のため屋外建設工事がままならず、それが大きなネックであり、日本人の品質管理と韓国流管理とでたびたび衝突する場面もあったが、筆者は Structure の部分を終えて2015年の12月末に現地を引き上げた。実に長丁場の興味深いプロジェクトであった。

(11)加えてモンゴル滞在中、冬場の厳冬期という端境期を利用して3年前に Rio : 筆者が30数年前に勤務していたブラジルの会社の造船所と陸上工場跡地を訪問、また東北部の造船工場で約2週間、日本でも何かと話題になった海洋構造物(Drill Ship)の建造能力のレベルを検証する“モニタリング”を行う機会を持てた。Brasil World Cup 直前の出来事！また、インドネシア、シンガポールにも2週間程度の工場サーベイを実施したことがある。実に多くの国で貴重な経験をして来たものである。これはすべて健康と安全に恵まれた結果であり、プロジェクト、国を問わず最後は無事帰国できた事は何にも代えがたいと感謝。

4. 第2の人生(海外放浪)に関するまとめ

- 1) 田舎出身の筆者は初めから海外を指向した訳でもなく、大学卒業後その時その時の与えられた職務に邁進しながら“Chance”に挑戦し続けて来たという事かと思う。
- 2) 健康が第一、同じ人生なら変わった生き方にチャレンジして行こうと思うのも自由。
- 3) この14年間の海外放浪の旅は非常に辛いこと修羅場もあったが楽しい思い出深い人生の一コマだった。今年の5月に蒙古へ荷物の片付けに行った際、表彰を受ける榮譽に！
- 4) 14年間の海外放浪の旅から解放されて半年、今は国内で積年の海外ボケの症状を癒そうと日本で努力している今日この頃ある。
- 5) 10数プロジェクトはそれぞれの味わいがあり、思い出がある。一緒に仕事をした Local Engineer の顔やその地方の風景や思い出が走馬灯のように頭を掠めるものである。
- 6) 今年の4月からは筆者のモンゴル時代に共に働いたモンゴルのエンジニアが筆者の書いた推薦状が幸いしたのか分からないが埼玉大学の大学院に招請され奨学金を受けて勉強中である。たまには日本で成長している彼に会えるのも楽しみである。
- 7) いずれ時間を作り、プロジェクト毎の技術的な問題や住んだ町でのハッピングや思い出を写真を含めて集大成してみたいと思うがいつになることやら？
- 8)当初“人生いたるところ青山あり“という心境で海外放浪の旅に出たがまさにその通りの海外放浪の旅であったと思う。これからが第3の人生の始まりである。さてどうなるか？

添付写真： 写真1:コンサルタント業を開始した年のペルーにおける発電プロジェクトにて
 写真2 & 3 : 建設中のウランバートル国際空港と表彰式 (盾とメダル)



Photo1 Peru 発電所建設現場へ向かう車中より撮影した Amazon 河上流にかかる虹・2002.8



Photo2 NUBIA Construction Project (Mongolia) as of .May 17th. 2016



Photo3 Award of Mongolian Builders Assoc. to Fujiki from the President on May 2016